

居場所からアウトリーチへ

—若者支援を担う NPO との連携を通じたフリースクールの支援の変容に関する事例分析—

佐 川 佳 之*

From Creating Place to Outreach: A Case Study of the Transformation of Support in a Free School through Collaboration with a Youth Support NPO

Yoshiyuki SAGAWA

1. 本稿の目的

本稿は、フリースクールの支援が若者支援を担う NPO との連携を通じて変容する過程について考察するものである。

日本のフリースクールは、学校外における不登校の子どもの居場所として展開してきた。その特徴について、フリースクール・東京シュレーに言及しながら子どもの居場所を論じる住田 (2014) に依拠し、まとめるならば、他者による共感的な関わりの中で子どもが受容・承認・肯定され、安心できる場として捉えることができよう。これまでのフリースクール研究においては、こうした特徴を含め、フリースクールの居場所の実態が主にフィールドワークの手法を通じてその内部の視点から明らかにされてきた (例えば朝倉 1995, 佐川 2010, 井上 2012, 森田 2008 など)。

ところで、近年観察できるのは、フリースクールが多様な形で外部のアクターと連携しているという側面である。教育特区による行政と東京シュレーの連携 (奥地 2015 pp.168-189), 通信制高校とフリースクールの連携 (阿久澤 2015) などにみられるように、フリースクールが行政や学校と連携している例が散見される。またフリースクールやオルタナティブスクール間のネットワーク組織が全国規模、あるいは地域規模で形成されている例も見られる。

こうしたフリースクールの動向の中で、フリースクールと外部のアクターとの連携を分析した研究が重ねられている。ここでは、フリースクールをめぐる連携を主題とする / 連携に言及する研究、かつ近年の活動の実態にアプローチする研究に絞って先行研究を概観してみたい。先行研究は、主に①学校や行政などの外部のアクターと連携するフリースクールの活動のあり方や、②連携を可能にする社会的基盤に焦点を当ててきたと言える。まず①の研究について、マクロな視座からフリースクール・オルタナティブスクールと学校との連携の実態に関する検証 (藤根 2019a), およびミクロな視座から通信制高校と連携するフリースクールを例に、広域通信制高校のサテライト施設としての特徴 (阿久澤 2015), 利用者の進路形成 (藤村 2018), 「フリースクールらしさ」と学習支援の関係 (井上 2013) に関する分析がなされている。また

*人間関係学科 准教授

行政との連携によって、フリースクールの活動の範囲が、通常の不登校支援の枠組みからこぼれ落ちる、困難な家庭環境を抱える子どもの支援にも拡大する点を指摘する武井（2016）の研究もある。一方、②については、行政とフリースクールの連携の背景を分析する研究（本山 2014、山田 2017）、また多様なオルタナティブスクールの組織間の連携を可能にする集合行為フレームの特徴を明らかにする藤根（2019b）の研究などがある。

これらの先行研究では、通信制高校や行政と連携するフリースクール、あるいはフリースクールのネットワーク組織における連携などが事例としてとりあげられ、それぞれの主題を通じて近年のフリースクールの多様な現実が浮き彫りにされている。先行研究が示す諸事例からすれば、個々のフリースクールがどのアクターと連携を試みるかによって、個々の連携の特徴やそこから生み出される教育や支援の活動が多様だと想定できる。

フリースクールと外部のアクターとの連携が、どのようにフリースクールの活動に影響を及ぼすのか。この課題を考える上では、それぞれのフリースクールの社会的状況の違いを想定しながら、個別の事例分析を進めていくことが必要であろう。本稿は①の研究に立場を置きつつ、フリースクールと福祉の領域で活動する民間団体との連携に着目する。具体的には、フリースクールとひきこもりなどの若者の支援を担う NPO との連携の中で生じるアクター間の相互作用によって、フリースクールの支援が居場所からアウトリーチ（訪問支援）へと変容するという事例を検討する¹。そこからフリースクールと外部のアクターとの連携をめぐる一つの現実を示したい。

2. 事例分析

2.1. 分析対象と方法：フリースクール A と支援団体 B

以上の課題の事例分析として、2002 年以降、筆者がボランティア・スタッフの立場で調査を行ってきたフリースクール A（仮名）の主宰者である D（男性・教員免許所持）の視点から、同フリースクールと若者の支援を担う NPO 法人支援団体 B（仮名）との連携の現実を考察する²。具体的に本稿では、2009 年から 2017 年の間に不定期に行った調査で得られた支援者の語りをもとに分析する。フリースクール A に関しては、同期間以前の情報を含め、D へのインタビューとその支援の参与観察から得た資料を用いる。支援団体 B については、D からの紹介を通じて、スタッフ（G：女性・専門的資格を所持しない、I：女性・教員免許所持）と支援団体 B の設立者の元スタッフ（U：男性）に対して、本研究の目的・内容と論文化する旨を説明した上で、インタビューを 1 回（それぞれ 60～90 分）行い、資料を得た。

まず二つの団体の概要と関係の背景を簡単に述べる。フリースクール A は東京都内で 1975 年に A という学習塾として D によって設立された。1991 年に A 内部にフリースクール部門が作られ、活動が不登校支援に特化していく中で、その翌年に「フリースクール」という言葉を加えたフリースクール A へと改称がなされた。フリースクール A では、「・・したい」といった意欲の回復が支援の目標として重視され、そうした目標のもとに居場所などの活動が行われてきた。そこには、不登校の子どもやひきこもりの若者のほか、発達障害や何らかの精神的な困難をもつとされる者など多様な人々が受容されてきた。組織としては D の個人経営という形がとられ、一時期を除いて D の自宅の一階が活動の場所として使われてきた。2017 年 12 月現在、常勤スタッフは D のみである。活動時間については、2017 年時点で、フリースクールを紹介するガイドブックにおいて年中無休で電話相談や学習時間が 9：00～19：00、メール相談が随時と表記されている。ただし 00 年代の前半においては、例えば 2003 年時点の同ガイ

ドブックには活動時間が「いつでも」との表記があるように、D は夜間にも生徒（フリースクール A を利用するメンバーを表す際にはこの表記とする）を受け入れ、電話やメールなどの相談に対応するような形をとっていたこともあった。時間の面での柔軟な対応は D の意識とともに、D がほぼ自由に使用できる自宅という空間によってなされてきた。こうした D の柔軟な対応がフリースクール A の活動の特徴の一つだと言える。この居場所をベースにした活動は 00 年代前半まで活発であったものの、00 年代後半以降、居場所に頻繁にやってくる人々が次第に減少する。2017 年時点では特別な場合を除いて居場所への受け入れがなされていないが、以下で述べるように、支援団体 B との連携を通じて、ひきこもりの若者を対象としたアウトリーチへと活動の内容が変容している。

一方、フリースクール A が連携する NPO 法人支援団体 B は、学校法人を母体とし、広域自治体 P において U を代表として設立された団体である。そこでは、「療育」を基本とした不登校・ひきこもり支援が実施されている。D は U からの協力依頼を受け、2006 年の設立当初から支援団体 B の理事となり、とりわけ 2009 年以降、徐々にここでの支援に積極的に関与するようになる。そのきっかけは、古くからの支援者仲間である U から支援団体 B の設立と活動への協力の依頼を受けたことにある。U は個人として 1980 年代から不登校支援に関わり、D とは 1990 年代に知り合ったという（2015 年時点で U は別の支援団体で若者支援の活動を続けている）。二人は互いの支援に対する考え方や経歴をよく知る間柄である。U は協力の打診の経緯について、「子どもたちと直接、接していて。もう必要があれば、一緒に寝泊まりしてというところまでね。病院でも一緒に連れて行こうみたいなことまでやってくれるような。必要があればアウトリーチもしちゃうような。そういう人がいてくれるといいじゃないかということに入ってもらった」（2015/9/17）と語る。ここからは、U が D の経験と人柄を高く評価していたことがわかる。フリースクール A と支援団体 B は同一のネットワーク組織などには所属しておらず、この個人的な関係によってつながったと言える。

支援団体 B は個人経営のフリースクール A に比べ、スタッフ、利用者数、及び活動の規模や組織の面で大きな団体である。ビルの一つのフロアが活動の場所であり、それはフリースクール A と比べて広い。ここでは個々の社会的スキルの支援が重視され、また利用者の年齢や対象ごとに支援の部門が分かれ、部門をベースに支援活動が行なわれている。その中でも、D は主にひきこもりの若者を対象とした居場所やアウトリーチ、相談会などを行う部門で活動している。G の語りに基づく、同部門には 2017 年 2 月時点で、10 代後半から 30 代前半の利用者 23 名くらいが在籍し、不定期に関与する者を含む 5 名ほどのスタッフ（この人数には D は含まれていない）が関わっている（2017/2/23）。具体的に D は週に 2 日ほど居場所で活動し、それ以外のスケジュールでアウトリーチにも従事している。さらには保護者を対象にした相談やセミナーに関わることもある。なお、支援団体 B における居場所とアウトリーチの活動は、後述する広域自治体 P の「W 事業」（仮名）とその後継事業のプログラムに由来する。

支援団体 B への D の関与の度合いはその実際の活動にまで及んでおり、両者が強い関係にあると言ってよい。しかし、このことはフリースクール A の活動の縮小を意味しない。フリースクール A ではもともと不登校の子どもやひきこもりの若者を主な対象とした居場所の支援が行われてきたが、支援団体 B との連携の過程の中でフリースクール A としてもアウトリーチの活動が実施されるに至っている。こうした居場所からアウトリーチへのフリースクール A の支援の変容は、D による支援団体 B の活動への関与を契機に生じており、連携がもたらした影響としてみることができるだろう。この意味で、外部のアクターとの連携が及ぼすフリー

スクールへの影響を分析する上で、有効な事例だと考えられる。以下では、連携をめぐる支援者の語りからこの過程を考察し、フリースクールと外部のアクターとの連携の現実の断片を示してみたい。

2.2. 支援団体 B との連携がフリースクール A にもたらした影響

本節では、フリースクール A と支援団体 B の連携の背景、および連携がフリースクール A にもたらした影響について語りから考える。

2.2.1. フリースクール A と支援団体 B の連携の背景

先述のように、フリースクール A では 00 年代後半以降、それ以前に比べ居場所に頻繁にやってくる生徒が減少していった。この減少について、D はフリースクールをめぐる社会状況の変化を強調する。この時期の生徒の減少についてインタビューを行ったところ、D は「うちは（生徒が）多すぎたと思っていたから。もっといろんなところにたくさんそういうのができればいいなってその頃は思っていたから、それほど考えていなかったかな。で、その 2000 年くらいにいろんなフリースクールがどんどんあっちこっちでできていったから、そういうところに近くて行けるようになればいいなってくらいにしか思っていなかったから」（2015/5/9）と振り返る。ここでは、その生徒の減少の理由として、フリースクールの増加があげられている。だが、他方でそれは、フリースクール A における居場所の活動の存続の危機につながりうる事態だったとも言える。

そうした中、先述のように、2009 年以降、D は 2006 年から理事を務めていた支援団体 B より活動への協力依頼を受け、活動の軸をフリースクール A から支援団体 B へと徐々に移行していく。その契機となったのが、支援団体 B によるひきこもりなどの若者の支援を目的とした広域自治体 P との協働事業「W 事業」であった。この事業は、2008 年度に開始され、自宅への訪問による相談や支援、自宅外の居場所、社会参加といった三つの支援の内容で構成されるものであった³。支援団体 B も含め受託した団体はその三つの内容から事業を選択・展開するといった形がとられていた。D が活動に関与するようになった 2009 年度の時点で、支援団体 B はこのうち一つ目のアウトリーチに関わる内容と二つ目の居場所に関わる内容のカテゴリーで活動していた（同事業の 2009 年度の案内による）。2017 年現在、同団体はその後継事業の実施団体の一つとして同様の活動を継続している。

まず D が依頼されたのは、ひきこもりの子をもつ親に対する講演会であった。それは 2009 年 4 月から毎月 1 回のペースで、支援団体 B の部屋で実施されていた。その後、D は徐々に支援団体 B の活動への関与を深め、居場所やアウトリーチなどの活動に関与することになる。

こうした連携の背景を踏まえた上で、次項ではフリースクール A と支援団体 B の連携において、D の存在や支援のやり方がどのように位置づけられているのか、また同団体での D の支援に対する意識とはどのようなものなのかについて検討する。具体的には、D の関与の度合いが強い支援団体 B の居場所とアウトリーチの活動に着目し、それぞれの場面での D の位置づけと意識を分析する。結論を先取りしてしまえば、それらの場面での D と支援団体 B のスタッフや規範との相互作用が、支援団体 B の支援を維持するとともに、フリースクール A の支援のあり方を変えていくことが示される。

2.2.2. 支援団体 B の居場所における D の支援の位置づけ

支援団体 B の居場所の支援における D の位置づけと意識について、D が居場所の場面でのような役割を担い、支援を行っているのかという問いから考えてみたい。この文脈における D の役割の内容はその呼び名から推察できる。フリースクール A において、D はスタッフや生徒から「D 先生」と呼ばれている。他方、支援団体 B の居場所の活動では、フリースクール A と同様に「D 先生」という呼び名に加え、主に利用者、また文脈によってはスタッフから「O ちゃん」と呼ばれている⁴。この「O ちゃん」というニックネームは父親を意味する呼び名であるが、この呼び名と D の存在について、支援団体 B のスタッフは次のように解釈している。

「皆さんから O ちゃんと呼ばれていますね。D 先生が安心感が。でもなんというか先生はあの自分からどんどん話しかけたりとか、そういう感じではないと思うんです。本当に居場所にどーんと座っていて。あまり席を移動されないと思うんですよ。そこに先生がいるところにメンバーさんがよってくるという感じですかね。」「役割でいったら、でも職員たちにとっても安心感かもしれませんね。そう。先生がいるぞという。」(G：2017/2/23)

「O ちゃん。みんなも O ちゃんって呼んでいるんですけど。(中略) 大人の男の人で、どんな他の人が聞いたら「は？」って言われることでも、疑問に思ったことを聞いて、なんらかのヒントはもらえるっていうところなんですよね。それで見守ってくれる。」(I：2017/2/23)

このように、D が居場所における利用者のみならずスタッフにも安心感をもたらし、見守ってくれる役割をもつ存在として語られ、そうした役割が父親を表す「O ちゃん」という呼び名で表現されていると言える。ただし、支援団体 B におけるこの呼び名に対する意識について、D は「フリースクール A と同じ。僕はフリースクール A ではみんなは「先生」って呼んでいたけれど、誰がスタッフか誰がどうだかって全くわかんないようにしていたのは同じ」と語る(2017/8/24)。支援団体 B の活動の中で「O ちゃん」という呼び名が加わったが、利用者との関係という点では D の支援に対する意識はフリースクール A とほとんど変化しておらず、フリースクール A の延長にあると言える。

D の位置づけを確認するために、他のスタッフについてもみてみよう。居場所の場面でのそれぞれ支援者としての性格や役割に対する自身の語りを引用するならば、「からいことを言う人」(I)、「(G に対して) いじりやすいような雰囲気を作るようにはしている」(G)といった自己の語りがインタビューから確認できる(2017/2/23)。こうしたスタッフの差異は、居場所におけるスタッフの支援のやり方にも表われる。例えば、I は「不登校していた子たちは学校でみんなと何かを作り上げる喜びとか、話し合いつてこうするんだよとか知らないんですよ」(I：2017/2/23)と述べ、「やり残しはしないようにする」「体力づくり」といったことを自身の支援において重視する点としてあげている。この考えから I はスポーツや修学旅行などの企画を考案している。また G は「メンバーさんがいずれ一人暮らしした」ときのために、料理を作る企画や「女性ならではの会話」がしやすいような空間としてお茶会という場を作っている。

こうしたスタッフの役割の差異について、支援団体 B のスタッフの I は次のように述べる。

「① D 先生は「全部それでいいんだよ」っていうのがすごくいいなと思うんですけど。あの。私たちとかもっと若いスタッフとかが「それでいいよ」っていうのと先生が言うのとは違いますよね。あの、いろんなことをやってきて、いろんなことを知っているから、「何でもやってたらいいいと思うよ」って重みが違うんです。」(I：2017/2/23)

「②もうチームなので。はい。一人で「寄り添い」も「厳しいこと」も「いいんだよ」も言えないじゃないですか。G さんがそういうと、私みたいな立場にたつと、余計みんなが「くっ」て傷つくんですよ。私はからいことを言う人なので、叱咤激励っぽく受け止められたとしても、彼女 (G) に言われたら終わりだなみたいな。」(I：2017/2/23)

この①の語りからすれば、D の支援のやり方や言葉には若いスタッフにはない「重み」があるとされ、一定のヒエラルキー的な関係の中に位置づけられているように見える。だが、②の語りにあるように、居場所の支援において「チーム」というメンバーの意識が存在しており、役割は序列というより差異として顕在化している。すなわち D の支援のあり方は、支援団体 B の居場所の文脈の中で、「チーム」の多様な役割の一つとして位置づけられていると言える。

2.2.3. 支援団体 B のアウトリーチにおける D の支援の意味

D はフリースクール A での居場所の支援に長年関わってきたことから、上記の支援団体 B の居場所の活動は彼にとって馴染み深いやり方であると考えられる。それは、先述のように、「O ちゃん」という呼び名が加わったとしても、利用者との関係に対する意識が変化していないことから推察できる。

他方、支援団体 B のもう一つの活動の軸であるアウトリーチは、D にとって新しい活動に見える。しかし、D によれば、以前からフリースクール A として訪問による支援自体は行なわれていたという。すなわち「アウトリーチという言葉は全然使っていなかったし、訪問という言い方もあんまりしていなかった」「(アウトリーチは) 普通のフリースクールの継続のなかの一つ (の活動) であったから」(2015/5/9) という D の語りにあるように、それは居場所の支援を主とする中で、明確に概念化されていなかった方法であった。D にとって、「アウトリーチ」とされる活動は居場所の延長にある支援だったことが窺えよう。

このような居場所と明確に区分されていなかった方法が、支援団体 B との連携の中で、アウトリーチという新しい支援として顕在化していく。すなわち、それはフリースクール A における D の支援のやり方が、支援団体 B における居場所とアウトリーチという支援の категория との関係の中で再構成され、支援団体 B の文脈に埋め込まれていく過程だと言える。

以下ではこの D の支援をめぐる再構成の過程について、支援団体 B で作成され、D が執筆者として関与したアウトリーチの支援者養成の「テキスト」とその作成過程に着目し、検討してみたい⁵。ここでこの「テキスト」を取り上げるのは、そこに D のアウトリーチの基本的な理念や目標が記述されており、またそれが支援団体 B のアウトリーチの活動に影響を及ぼす言説の一つにもなっていると考えられるからである。

【「テキスト」におけるアウトリーチの目標】

最初に「テキスト」の背景について触れておこう。支援団体 B においてアウトリーチの活動を行う上で、民間団体の助成金事業の一環としてひきこもり当事者へのアウトリーチを担う人材（「支援員」と呼ばれる）を育成する講座が計画され、2011 年 10 月に D、そして D の誘

いを受けて筆者もその講座の講師を担当することになった。この講座終了後の2011年11月に、同講座が2012年にも実施されることが決まり、同時に講座用の「テキスト」作成が企画された。Dと筆者は、支援団体Bのスタッフとともに、「テキスト」作成に関与することになった。「テキスト」作成に関与した支援団体Bのスタッフは、心理学の専門家や特別支援教育に関わる専門家で構成されていた。その発行は予定通り2012年に行われている。

この「テキスト」は3部・13の章と9つのコラムで構成される。Dと筆者は第1部の1～4章の担当を任された⁶。Dは、支援団体Bにおけるひきこもり当事者の親を対象にした講演会や、アウトリーチの支援者の養成講座の配布資料をもとに執筆した。執筆にあたっては、Dと筆者がEメールを通じて相互に内容をチェックし、文章を加筆するなどの作業を行った。この作業の間、支援団体B内の研究会（2012/3/31、および2012/5/11）において、「テキスト」の草稿が議論され、執筆内容や表現などの改善点がそれぞれに提示された。この研究会でのコメントをふまえながら、Dと筆者は原稿の修正を行い、最終稿を書き上げていった。

この「テキスト」におけるDのアウトリーチの言説とは、どのような内容なのか。「テキスト」では当事者の特徴や支援の目標、方法など多岐にわたるテーマでDは執筆しているが、ここでは「テキスト」で語られるアウトリーチの支援を支える目標に絞ってみたい。ひきこもり支援におけるアウトリーチの意義について、Dは次のように述べる。

「筆者の経験からの話になりますが、不登校・ひきこもりの子どもたちや若者たちと関わった当事者の95%以上が、各々の道を切り開いて巣立っていきました。

つまり会うことができて、いろいろな話しができて、将来の話しを一緒にすることによって、何もなくても飛び立って行きました。自信を持つと自分からチャレンジするようになります。それまでの失敗が自分を強くし、次の自分に役に立つようになります。

何故そのような成果が上がったのかと良く聞かれますが、それは当事者本人と会うことができたことが、いちばん大きなきっかけであると筆者は今でも思っています。

北は北海道から南は与那国島から、不登校・ひきこもりで悲痛な気持ちから抜け出そうと、連絡をくれたり足を運んでくれたりした当事者は、もう動き出しているのです、それほど難しくはありませんでした。

それさえもしたくてもできない子どもたち・若者たちが、実はたくさんいるのです。誰とも関わろうとしないで、布団をかぶったままの若者がたくさんいるのです。（中略）

だからこそ、アウトリーチすなわち訪問して手を差し伸べる意義がここにあるのです。訪問することによって、いろいろな気付きがあります。親と話しをすることもできます。家族との関係も見えたりします。」（「テキスト」, pp.38-39）

ここにはフリースクールAという居場所を拠点にした支援の成果が述べられているが、特に「当事者本人と会うことができたこと」が成果の大きな要因として位置づけられている。しかし以上の記述からすれば、「会うことができた」のは当事者が「連絡をくれたり足を運んでくれたりした」からなのであり、その一方で動き出すことができない当事者が存在している。つまり、Dはアウトリーチの意義について、後者のような当事者に対して「訪問して手を差し伸べる」ことを強調していると言える。

その上で、具体的にDは当事者とその支援の目標をどのように捉えているのか。まず当事者像について、Dはアウトリーチを必要とする当事者について次のように指摘する。

「ひきこもり当事者に特徴的な感情として、教師や大人に対する不信、家族兄弟への不信、級友や同年齢への不信、上司・同僚・友への不信、病院・医師や臨床心理士への不信といったものが見受けられます。支援員としては、まずこうした当事者がもつ不信感を払拭する必要があります。」(「テキスト」 p.54)

ここでは、当事者の特徴として、かれらが周囲の人間関係に不信感を抱いているといった点があげられている。末尾の記述が示すように、アウトリーチを担う支援員は不信感を払拭することが求められるという。

またアウトリーチの目標については、「してみたい」「やってみたい」「行ってみたい」といった意欲や活力を引き出すことが最初の支援の目標として設定されている(「テキスト」, p.31, 第4章)。先述のように、フリースクール A の目標の一つとして、意欲の回復があげられるが、そうした目標は D のアウトリーチの語りにおいても反映されていると言える。

こうした D が語るアウトリーチの目標は、彼がアウトリーチの支援員を養成するという「テキスト」の執筆を任せられていることから推察されるように、支援団体 B の文脈の中で一定の正当性をもつ支援のあり方として位置づけられていると考えられる。またその目標はフリースクール A での支援のそれと重なるものである。すなわち、支援団体 B のアウトリーチの「テキスト」と講座を契機に、フリースクール A での D の支援の目標が同団体のアウトリーチを支える資源の一つとして再構成されたと捉えられる。

その後、D は講座の講師に留まらず、支援団体 B のアウトリーチの活動にも実際に関与することになるが、それは活動の文脈においても、この目標がその活動の基盤の一つになっていることを意味していよう。以下では、支援団体 B のアウトリーチの活動の文脈の中で、D がどのように意味づけられているのかについて、D と支援団体 B のスタッフの語りから検討したい。

【アウトリーチの活動の文脈における D の位置づけ】

アウトリーチに関するインタビューからは、活動の中で D の知識が他のスタッフへと伝達される様子が読み取れる。D 自身、支援団体 B の支援において「スーパーバイズ」する役割を自認する(2015/5/9, 2017/8/24)。すなわち、教える／学ぶという関係の中で、D の知識のあり方が、アウトリーチの活動を支えるものとして語られていることが推察されよう。その例として以下の語りをみてみたい。

D：二人でいったり、三人でいったりしてみたときに、三人の意見としてどうなるかというの必要だし、僕だけの見立てが絶対正しいわけじゃないから。あの僕の気づかないところに気づいたりするから、一人ではなくて必ず二人くらいでいくようにはしているんだけどね。でもやっぱり一緒に連れて行った人たちなんかでも、あの、一方向しかみてなかったりすると、気づかないこといっぱいあったりするんだよね。そうじゃなくて、その言葉の影にあるものがなにかの話をすると、その場でも話をすると、本人が当人がそうなんですっていったりするんで。

筆者：読み取り。

D：結局、そこだよね。読み取りで。それは何を訴えて言おうとしているのかとか、その動きはマイナスにとらえているけど、実はプラスだったりするんで、その見方が一つで違っちゃうから。言葉じりで右往左往する人たちがいっぱいいて、そういう人たちの

多くがその言葉で判断しちゃうから、いやそれは違うでしょっていう話をよくするのね。
(2014/9/5)

この語りの下線部にあるように、アウトリーチの支援者の役割として、当事者の言葉の含意の読み取りが重視されている。またこの語りからは、Dがその読み取り方などを他のスタッフに伝達していることが窺えよう。他方、インタビューにおいて支援団体BのスタッフのIは、Dのアウトリーチの支援について次のように語っている。

「私は訪問のときに（D）先生の「ぼっ」てだす、サジェッションみたいなものとかに気づいたりとか。いっしょにいつて何回かしたときに、私の座り位置はここでよかったのかなっていうことは先生に聞いて、答え合わせしてもらったりとか。」（I：2017/2/23）

この語りから窺えるように、Dの知識のあり方は、支援団体Bのスタッフにとって支援の適切性を判断するためのガイドラインとして捉えられている。アウトリーチの支援の場面で伝達される内容は、先述の言葉の読み取り方や訪問時の座る位置のほか、当事者の居住地の特徴の理解などにも及ぶ（D：2017/8/25）。こうしたDのアウトリーチのやり方は、支援団体Bのアウトリーチを実施するための一つの資源として位置づけられ、活動の維持に寄与していると言える。

2.2.4 連携におけるDの葛藤とアウトリーチの支援の再構成

しかし、改めて確認するように、Dの居場所やアウトリーチのやり方はフリースクールAでの支援の経験に依拠したものである。そうした背景をもつDのやり方は支援団体Bの支援のそれとの差異により、彼自身の葛藤を引き起こすことにもなる。これについてここで具体的に指摘したいのは、フリースクールAと支援団体Bの規範の差異である。

まずその例の一つとして、時間に関する規範の差異があげられる。繰り返すように、フリースクールAでは、Dの裁量でほぼ自由に使用できる自宅において時間の面で柔軟な支援体制がとられてきた。一方、支援団体Bではアウトリーチの時間が土日以外で午後6時までと決められているという（D：2015/5/9）。また居場所の利用者の受け入れの方法についても、団体間の規範の差異がみられる。フリースクールAではD個人が判断するが、支援団体Bでは、「職員で会議にあげて必ず検討して、どういう支援ができるかとか考えてからにしていますね」とGが語るように、受け入れは組織的な判断で決められる（G：2017/2/23）。これらの規範の例からは、D個人によって運営されているフリースクールAと複数のメンバーで組織的に運営される支援団体Bの規範の差異を読み取ることができる。

こうした規範の差異に関してDは次のような葛藤を示している。

「（支援団体Bでは）フリースクールAのやり方を僕はやらないようにしているから。（中略）（フリースクールAだったら）OKですぐやっちゃうけど。（中略）支援団体Bみたいに組織になっちゃうと、やりたいことができるかという、難しいかな。」（D：2015/5/9）

何度も繰り返すように、Dの支援のやり方はフリースクールAでの経験に依拠したもので

ある。しかし、この「やりたいことができるか」というと、難しいかな」という語りからすれば、それが支援団体 B の文脈の中で一定の規制を受けていると考えられる。すなわち、D は支援団体 B においてフリースクール A と同じやり方で活動を行っているというより、支援団体 B の文脈を参照しながら支援を選択的に実践していると言える。先程、支援団体 B の居場所の活動の文脈において利用者との関係がフリースクール A と変わらないという D の意識を指摘したが、支援団体 B 全体の文脈で考えるならば、実際のところその意識には一定の規制が作用していると推察される。

その意味で、D の支援団体 B への関与は部分的な領域に留まる。その姿勢は D のアイデンティティの意識にも見て取れる。D は「(支援団体 B の) 非常勤ではなくて、外部スタッフでしょ。だから僕は支援団体 B の人間ではない。でもだからそういうスタンスで常にいるから」(D：2017/8/24) と語るが、「外部スタッフ」、あるいは「支援団体 B の人間ではない」という語りはフリースクール A と支援団体 B との差異化を示すものとして捉えられよう。

こうした葛藤やアイデンティティに見られる差異化は、連携を阻害する要因になるようにもみえる。しかし、それはフリースクール A と支援団体 B の連携による支援、とりわけアウトリーチの支援を拡充させる契機となる。具体的に言えば、D はそうした葛藤とアイデンティティを通じて、支援団体 B の支援の範囲の外側にある当事者のニーズを顕在化させ、さらにそのニーズをフリースクール A の文脈に位置づけることで、支援団体 B の支援の範囲を広げていくのである。

この顕在化されるニーズの例として、支援団体 B の時間の範囲外の支援のニーズがあげられる。これについて、D は次のように語る。

「支援団体 B の場合も、支援団体 B で扱えないのは全部こっちになっちゃうから。フリースクール A になっちゃうから。(筆者：それってフリースクール A としてやっている形になるんですか。) そうなっちゃう。その場合は。例えば 6 時までだったら支援団体 B で訪問するけど、6 時以降は訪問がないわけね。6 時以降じゃないとだめだというときは、じゃ請け負うのはどこになるかといったら、フリースクール A でうける。」(D：2015/5/9)

以上の下線部の語りにあるように、D は支援団体 B で決められた時間の範囲外の支援をフリースクール A として担っている。かつてフリースクール A では夜間も含め明確な時間制限のない支援が展開されていたように、時間の面での柔軟性がフリースクール A の特徴である。こうした姿勢は次のような D の実感にも支えられている。

「一回あうと、信頼されれば、いやこの時間でも OK というかもしれない。無理難題をふっかけてもそれをきちんと受け入れてこちらがするかしないかによって、むしろは信頼するかしないかというのもあるから。信頼すればきちんと今度こちらに合わせたりする人が実際には多いわけで、だから僕自身はまずは最初はどんな無理難題でも最初はうける。」(D：2017/8/24)

この語りが示すように、当事者の状況に応じて、要望に一定の範囲で応えることが信頼関係を築くための方法として捉えられている。しかし、こうした支援を実践するのは、時間の制限のある支援団体 B においては難しい。D は支援団体 B の支援の範囲外のニーズを認知し、そ

れを補う上でフリースクール A として夜間での支援を実践している。

このような柔軟な時間の対応以外にも、当事者の状況のタイミングをみて訪問回数を増やすこともあるという（D：2017/8/24）。こうした支援は、フリースクール A という D の個人の裁量性の高い文脈において可能となる。これについて、G は支援団体 B の立場から次のように語る。

「私たちは夜間のところがないところではあるので、そこはお願いしてしまったところはあります。はい。夜間で先生もメンバーさんのところに行かれたときもありましたしね。実際に。なので、その動きはこちらではできないから、有難いです、というところはあります。」（G：2017/2/23）

G の語りからは、フリースクール A としての支援で支援団体 B の支援の範囲を超えるニーズの部分を補う連携体制がとられていることがわかる。それはアウトリーチのみならず夜間のメール相談も含まれる（G：2017/2/23）⁷。D によれば、こうした場合、D がフリースクール A での支援の内容を支援団体 B のスタッフに伝達するという（2017/8/24）。

このように、D は支援団体 B に参加する中で、その支援の範囲外にあるニーズを認知し、そのニーズに対してフリースクール A の立場で支援を継続している。フリースクール A と支援団体 B の連携を基盤に、D の知識が支援団体 B の支援活動の資源の一つとなる一方で、D はフリースクール A と支援団体 B との規範の差異によって葛藤を経験する。しかし、規範の差異から生じる葛藤やアイデンティティの意識は、新しいニーズを顕在化させるとともに、そのニーズに対してフリースクール A での支援を新しい形で活発化させる契機となったのである。またそれは、当該の利用者に対する、両者の連携による支援の拡充にも結びついていると言えよう。フリースクール A の支援の変容は、このような連携におけるアクター間の相互作用を通じて生じたと考えられる。

3. 結論

本稿では、フリースクール A と支援団体 B の連携をとりあげ、それがもたらすフリースクール A の支援の変容について考察した。先行研究は行政や学校と連携するフリースクール、あるいはフリースクール間のネットワーク組織などの実態を明らかにしてきた。それに対して、本稿が取り上げたものは、支援者間のインフォーマルなつながりをきっかけとする連携であり、また実際に連携先の活動に関わるなど関与の度合いが強い事例だと言える。先述のように、支援団体 B において D の支援の知識が資源の一つとして再構成される一方で、D はフリースクール A と支援団体 B の規範の差異から葛藤を経験する。しかし葛藤やアイデンティティの意識から、D は支援団体 B の支援の範囲外のニーズを顕在化させ、当該の利用者への連携による支援を維持しながら、そのニーズに対してフリースクール A として新しい支援を実践している。本稿の事例は先行研究（武井 2016）が示す外部のアクターとの連携がフリースクールの活動の幅を広げる現実の一類型としてみるができる。本稿の意義としては、そうした支援の変容を生み出すミクロな場におけるスタッフ間、およびスタッフと規範との相互作用の経験の過程を示した点にある。

最後に今後の課題を述べたい。本稿はフリースクールの連携に関する課題について、若者支援を担う NPO に着目した事例分析を提示したものである。しかし、今日、フリースクールと

外部のアクターとの連携が多様な形で展開していることから、ミクロな視座からの事例分析を重ね、事例の比較分析を行う必要がある。フリースクールの意義が教育および福祉の領域で語られ、多様なアクターとの連携の重要性が主張される中で、現場でどのような活動が生成しているのか。今後、連携による活動の場へのフィールドワークやスタッフへのインタビューを行うことで、その課題に迫っていきたい。

【付記】

本研究は JSPS 科研費 26780484 による成果です。本稿は 2015 年 8 月 1 日の東海教育社会学研究会での発表原稿を、その後の調査を通じて、事実関係の記述の修正も含め大幅に改稿したものです。調査にご協力頂いた支援者の皆様、また研究会等で貴重なコメントを下された皆様に心より感謝します。

【注】

- 1 後述のインタビューでは「訪問支援」が「アウトリーチ」として語られる傾向にあったため、事例における訪問支援を示す際には、基本的にアウトリーチという言葉を用いることにする。
- 2 フリースクール A の所在地を除き、プライバシー保護のため、個人・団体・事業名・所在地などは原則仮名を用いる。なお、D は 2014 年よりフリースクール間のネットワーク組織・NPO 法人 C（仮名）の代表として活動するなど、支援団体 B 以外のアクターとのつながりももっている。本稿では、D が他のアクターに比べ支援団体 B の活動にその力を割いているという事実から、フリースクール A と支援団体 B の関係に焦点をあて、連携の過程を考察することとする。
- 3 地域名の特定を避けるため、三つの事業の名称についてそのまま記載せず、内容の提示に留めておく。
- 4 ニックネームについても、特定を避けるために、実際の呼び名を引用せずに、「O ちゃん」という表記に言い換えておく。
- 5 本稿では人物・団体特定を避けるために、「テキスト」の書名を伏せ、参考文献リストにも記載しない。本文での参照の際には、「テキスト」と表記する。なお、「テキスト」は市販されておらず、基本的にその使用はこの講座に限定されたものである。
- 6 「テキスト」第 1 章の不登校・ひきこもり問題の背景に関する内容を筆者、そして第 2～4 章のひきこもり当事者の感情や支援の方法・態度についての内容を D が執筆することとなった。
- 7 この連携の中で、アウトリーチ以外のフリースクール A の活動が再び活発化する兆候が窺える。フリースクール A のクリスマス会などの不定期のイベントにその卒業生が参加している様子が確認できる（2014/12/23, 2015/12/23, 2016/12/25）。フリースクール A のイベントの参加にはメンバーの資格が問われない。D はこの点についてフリースクール A が支援団体 B の卒業生の居場所にもなりうる点を語る（2017/6/11）。またフリースクール A の関連 NPO 法人が実施する自然体験活動にも支援団体 B のメンバーや卒業生が参加している。同団体との連携で生まれた当事者とのつながりがフリースクール A の既存の活動を活発化させる。

【参考文献】

- 阿久澤麻理子 2015 「広域通信制高校における学びを支えるフリースクール：後期中等教育の学習権保障の主体とは」『人権教育研究』第 15 巻，pp. 33-48.
- 朝倉景樹 1995 『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社。
- 藤村晃成 2018 「フリースクールからの大学進学をめぐるジレンマ：大学進学がもたらす光と影」『子ども社会研究』第 24 号，pp.115-132.
- 藤根雅之 2019a 「オルタナティブスクール・フリースクールと学校教育の連携：現状把握と活動状況との関連の

- 分析」『教育科学セミナー』第50号, pp.71-84.
- 藤根雅之 2019b「オルタナティブスクールの連携の技法：傘となる集合行為フレームの創発過程」『教育社会学研究』第104集, pp.237-257.
- 井上烈 2012「フリースクールにおける相互行為にみるスタッフの感情管理戦略」『フォーラム現代社会学』第11号, pp.15-28.
- 井上烈 2013「フリースクールにおける学習支援：学習支援ニーズの高まりと居場所づくり」『教育・社会・文化：研究紀要』第13号, pp.17-32.
- 森田次朗 2008「現代日本社会におけるフリースクール像再考：京都市フリースクール A の日常的実践から」『ソシオロジ』第53巻2号, pp.125-141.
- 本山敬祐 2014「不登校対策における教育行政と「フリースクール」の協働形成過程：境界接続者概念に着目して」『東北教育学会研究紀要』第17号, pp.15-28.
- 奥地圭子 2015『フリースクールが「教育」を変える』東京シュエ出版。
- 佐川佳之 2010「フリースクール運動における不登校支援の再構成：支援者の感情経験に関する社会学的考察」『教育社会学研究』第87集, pp.47-67.
- 住田正樹 2014『子ども社会学の現在：いじめ・問題行動・育児不安の構造』九州大学出版会。
- 武井哲郎 2016「不登校児童生徒への対応にフリースクールが果たす役割の変容：行政との連携による影響に着目して」『日本教育行政学会年報』42巻, pp.113-129.
- 山田銀河 2017「不登校支援における連携ネットワークとアクター間の関係：「神奈川県学校・フリースクール等連携協議会」の事例から」『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』第37号, pp.145-162.